

■ 美 術

◎美術常設展示について

当館美術部門の常設展示は、鳥取県にゆかりある美術作品や美術家、芸術活動を紹介・顕彰することを目的に、主に館蔵コレクションを中心として近世絵画、油彩画、日本画、彫刻、工芸、写真、版画、現代美術など幅広いジャンルにわたり展示を行ってきた。しかし、美術部門の常設展示においては定期的に全面的な展示替えを要するため、その都度展示の構成が大きく変更される。ゆえに、ここでは開館当初から現在までの変遷を中心に、美術常設展示の50年間を振り返る。

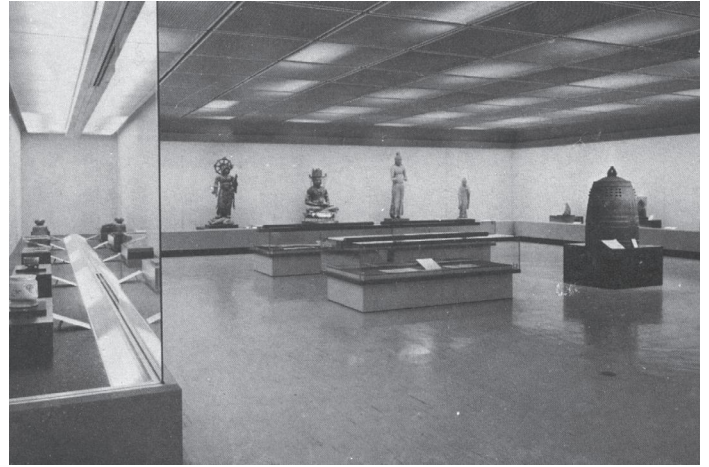
◎開館当初の美術部門常設展示(昭和47～57年度)

開館当初の美術部門常設展示は、「鳥取県の美術の歴史を一望できること」という目的が掲げられたものの、内容そのものは鳥取県ゆかりの指定文化財の展示・公開に主軸を置いたものであった。1階の「美術展示室」(260㎡)を美術の常設展会場に充て、国指定・県指定文化財を中心とした平安時代以降の仏像・仏画などの仏教美術、土方稻嶺らをはじめとする江戸時代の鳥取藩絵師を中心とした作家の作品、および刀剣、陶磁器などが展示され、常設展示の大半を古美術の作品が占めていた。指定文化財の公開施設という視点、および当時は館蔵作品に乏しく美術コレクションが未だ形成途上にあったことから、展示資料のほとんどは県内の寺社や所蔵家からの寄託・借用品であった。そして、資料保存の観点より作品の定期的な展示替えの必要性があり、毎月1回程度の頻度で一部、或いは全ての作品の展示替えが行われた。展示室の一区画では本県所在の国指定文化財の年表、展示資料の由緒、作者の略歴などがパネルなどで紹介された。

やがて常設展示を充実させる目的から、「特別陳列」と称して特定のテーマを設定し、作品を紹介する機会が設けられた。これにより昭和53年度からは「鳥取県の洋画」と題して、鳥取県出身の洋画家の作品も展示された。しかし、この時点における近現代作品の常設展示は、この「特別陳列」時のみであった。

◎近代美術展示室の開設と常設展の拡充 (昭和58～平成4年度)

昭和54年3月に鳥取県美術品取得基金条例が施行され、同56年には鳥取県再置100年記念として前田寛



開館初年度の美術常設展示(S47年)



特別陳列「鳥取県の洋画」(S55年)



エントランスホールに展示された
早川巍一郎《裸》(S50年代頃)

治の作品6点等を購入した。同年度中にはエントランスホールの一画に館蔵の鳥取県ゆかりの近現代作家による彫刻作品が常時展示された。

こうした美術部門拡充の流れの中で、館蔵の近代美術コレクションが年々充実したことに加え、近代美術作品の常設展示を望む声も高まったことから、昭和60年度より2階の第3特別展示室(374㎡)を「近代美術展示室」と名付け、特別展で使用される場合は作品を撤去するという制約はありながらも、美術常設展示会場としての機能を持たせた。以降、1階の美術展示室においては近世期以前の美術・工芸作品を、2階の近代美術展示室においては近現代の油彩画・日本画・彫刻・工芸・写真などの作品を、エントランスホールには近現代の彫刻作品を、それぞれ展示するという体制が整えられた。

近代美術展示室においては、場合によっては県内の蒐集家からの借用も行いつつ、特定のテーマ設定のもとで年間数本の展示が組まれるようになる。これにより「前田寛治と辻晋堂」(S63年度)のように前田寛治、辻晋堂、伊谷賢蔵といった鳥取県にゆかりある美術家個人の業績、或いは「砂丘社の人々」(S62年度)のように県内で展開された特筆すべき芸術運動などをテーマとする常設展開催の機会が増え、彼らを継続的に顕彰できる環境が整った。また、「砂丘一描かれた砂丘・写された砂丘」(H2年度)のように風景・人物・静物、具象・抽象といった主題/表現に着目したテーマ設定で、館蔵の美術コレクションを様々な切り口で紹介する展示会も開催された。さらに、同室では美術作品に親しんでもらうことを目的とした「ミュージアム・コンサート」等の特色あるイベントも開催された。

◎美術館整備事業が常設展にもたらした変化 (平成5～21年度)

平成5年、鳥取県教育委員会文化課内に「県立美術館基本構想検討委員会」が設置され、美術部門を分離・独立させる「県立美術館構想」が始動した。これに関連してか、同5年以降に近代美術展示室において開催された常設展の内容を見ると、「鳥取県の近代美術」「鳥取県の美術」という名前を冠したシリーズとして、分野ごと/時代ごとの展開を踏まえた展示となっている。新美術館開館に向けて、鳥取県内の美術史の展開をより通史的、総合的に紹介するための常設展示の在り方が模索されていたものと考えられる。その後、同



近代美術展示室として初の展覧会となった「前田寛治と福本和夫」(S60年)



第1回ミュージアム・コンサート(S62年)



「鳥取県の美術Ⅱ 郷土の彫刻家たち」チラシ(H9年度)

9年度には教育委員会文化課内に「美術館準備係」が、同11年度には「美術館開設準備室」(同13年度に美術館整備調査室と改称)が設置され、新美術館建設に向けた動きが本格化した。しかし同年、片山善博知事就任による各事業見直しの中で美術館建設もその対象となり、内容検討が不十分であるとして計画はその後凍結された。

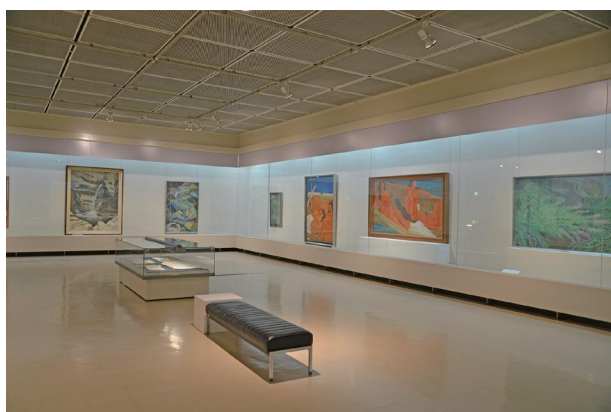
こうした中、平成12年度には美術館開設準備室が主催する形で「美術館を考える365日。鳥取県立博物館所蔵作品展」が開催された。鳥取県立美術館のコンセプトを再考するという視点で、博物館所蔵の美術コレクションの全貌を紹介することを目的としたこの展覧会では、鳥取県立博物館の美術展示室・近代美術展示室と、倉吉博物館、米子市美術館、日南町美術館の県内3館を会場に選び、時代/ジャンル区分のもとで「前田寛治とその周辺」「片山楊谷と島田元旦」等複数のテーマを設けながら、1年間にわたり美術コレクションを網羅的に公開した。当館が収集してきた「コレクション」そのものの存在に目を向けたこの展覧会が一つの転換点ともなり、同14年度の組織改正で美術係と美術館整備調査室が統合され、当館に「美術振興課」が発足すると、翌15年度には同じく近代美術展示室にて時代・分野の区分を問わず美術コレクションを紹介する「さわがしい部屋。古今東西美術品混沌の鑑賞のすすめ」が開催され、以降も「色彩美術館」(H18年度)など、同様に近世以前/近代以降という時代区分に拘束されないジャンル横断的なテーマ設定が試みられた。

なお、こうした変化は1階の美術展示室においてもみられ、平成16年度からはテーマ立てした展示スタイルが基本となり、「近世の風景画」(H16年度)や「近世絵画にみる描画技法」(H19年度)など、「陳列」に終始しない常設展示の在り方が模索された。

◎より美術を深めるための常設展の模索と県立美術館開館へ向けて(平成22年度～)

近代美術展示室では、平成16年度に開催された「コレクション研究所」などをはじめ、美術コレクションそのものに着目した展覧会が存在感を増す中で、平成22年度には1階美術展示室における展示を「コレクション展」へ、平成25年度には近代美術展示室における展示を「美術部門テーマ展示」へとそれぞれ改めた。これにより美術展示室では、近世から現代までの館蔵コレクションを中心として、分野ごとにテーマを定めて作品を紹介する展示手法がとられ、その一方で近代美術展示室においては、「生誕100年 濱田台児展」(H28年度)のように、より企画性の高い常設展示が志向された。

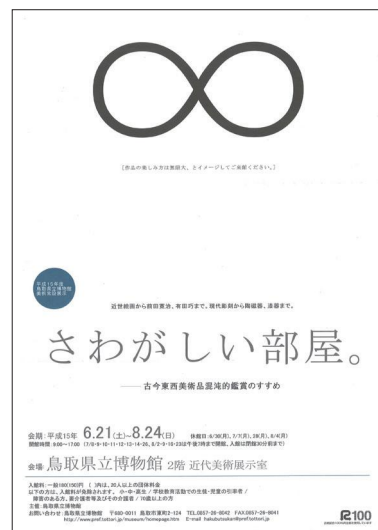
また、平成18年度の美術展示室で開催された「こどもたちのためのアートクルーズ」を皮切りに、同19年度からは近代美術展示室で「夏休み企画」と題して、「Go! Go! アート探検隊」(H19年度)、「対決! ホンモノ対アート」(H22年度)など、子どもも大人も楽しん



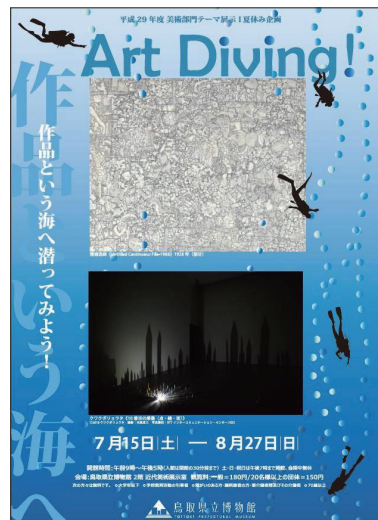
美術部門テーマ展示「生誕100年 濱田台児展」(H28年度)



「こどもたちのためのアートクルーズ」チラシ(H18年度)



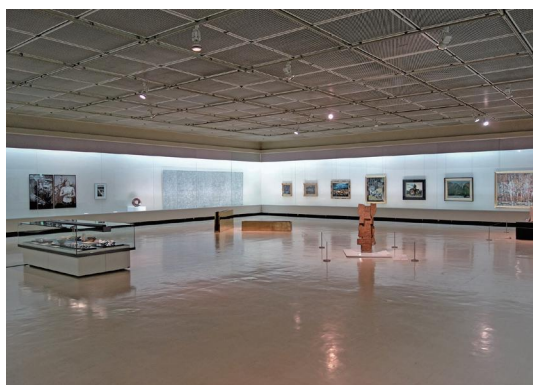
「さわがしい部屋。古今東西美術品混沌鑑賞のすすめ」チラシ(H15年度)



夏休み企画「Art Diving! - 作品という海へ潜ってみよう」(H29年度)

でもらえるような企画としての展覧会が開催される。また、こうした教育・普及的文脈の中で開催された「Art Diving！一作品という海へ潜ってみよう！」(H29年度)、「静/動」(H30年度)などの展覧会においては、インスタレーション制作やゲスト・キュレーターとして国内外で活躍する美術家を招聘した企画も展開された。

そして、平成30年7月、鳥取県教育委員会により県立美術館整備基本計画が策定され、「鳥取県立美術館」の令和6年度内の開館が正式に予定された。これに伴い、「美術家大辞典」(R元～2年度)と題して、新県立美術館の核となる美術コレクションを構成する作家を網羅的に紹介するための展覧会も開催された。また、「夏休み企画」の流れを汲み始まった「シリーズ 美術をめぐる場をつくる」(R元年度～現在)では、美術館に設置される「アート・ラーニング・ラボ(ALL.)」に向けて、作家の招聘や、ボランティアによるイベント実施、情報端末の活用、対話型鑑賞の導入など、多様な鑑賞の在り方を提示するための試行実験的な企画が組まれている。令和2年度に鳥取県ミュージアムネットワーク連携事業として開催された当館と米子市美術館の共同企画展「^{スピリット}生誕100年 杵島隆：不滅のパイオニア精神」では、当館コレクション・米子市美術館コレクションからそれぞれ作品を選定し、当館・米子市美術館の2会場で作品を展示した。このように、現在は美術館開館後を見据えた鑑賞プログラムの検討や、他館との連携の在り方を美術常設展という場において模索している状況にある。



美術部門コレクション展「美術家大辞典」(R元～2年度)



「生誕100年 杵島隆：不滅のパイオニア精神」におけるギャラリートークの様子



「シリーズ 美術をめぐる場をつくる Vol.3 瀧澤潔 鳥取県立博物館のためのインスタレーション」より、来館者による制作参加(R3年度)

ここまで、50年間を通じた美術常設展示の変遷について取り上げた。開館当初より、美術常設展は資料の性質として定期的な展示替えの必要があったがゆえに、展示の自由度が比較的高く、よって企画性に富んだ常設展が実現できる環境下にあった。このことが、よりよい展示の在り方を常に模索し、議論し、試行するサイクルを生んだ。その蓄積は、新たに開館する県立美術館の美術常設展へと引き継がれていくことになる。